

千葉市立郷土博物館主催

「政令市移行 30 周年記念、令和 4 年度特別展

我、関東の将軍にならん

—小弓公方足利義明と戦国期の千葉氏— 見学メモ (その 3)

2023.3.28 森 雅城

今回は、標記特別展紹介の 3 回目 (最終回) として、「第 5 章 復活の公方家—その後の小弓公方家と喜連川家の成立」、^{おゆみくぼうけ きつれがわけ}「第 6 章 現代 (いま) を駆ける—連綿と続く足利家の血脈」、^{あしかがけ けつみやく}そして「終章 総括—『小弓公方足利義明』が千葉市域と関東にもたらしたもの」について、内容を紹介させていただきます。

1. 関東における唯一の公方、即ち「関東の将軍」になろうとした小弓公方足利義明は天文 7 年 (1538)、北条氏との戦い、即ち第一次国府台合戦に於いて、戦術的な失敗とその内部に抱える問題点 (支える領主層の内紛による戦力の低下など) により滅亡します。
2. しかし、その後、北条氏を滅ぼし、天下を取った豊臣秀吉により辛うじて生き残った小弓公方家の子孫は、古河公方家と合体することとなり、その血脈は、江戸時代喜連川藩として存続することとなります。
3. その後、喜連川家は、足利名に復姓しますが、現代に至るまで、血脈は存続しています。今回は、その内容と共に本展においては、終章で、小弓公方足利義明が関東戦国史に残した歴史的な意義についても論じているので、それらも併せて紹介します。
4. なお、本展全体の理解を補う意味で今回も関連する年表を作成いたしました。これも別途添付しましたので、併せて参考にして頂くと幸いです。今回の年表は「中世、房総・流山の略年表」とし、「ふるさと流山のあゆみ」などによるものです。万一、間違っている箇所などがありましたら、ご指摘頂けると大変有難いです。



小弓公方家に関わる女性たち (本文第 6 章参照)

千葉氏中興の祖、千葉常胤の像=千葉市立郷土博物館、田口義武撮影 2022.10.22

足利義明の足跡たどる

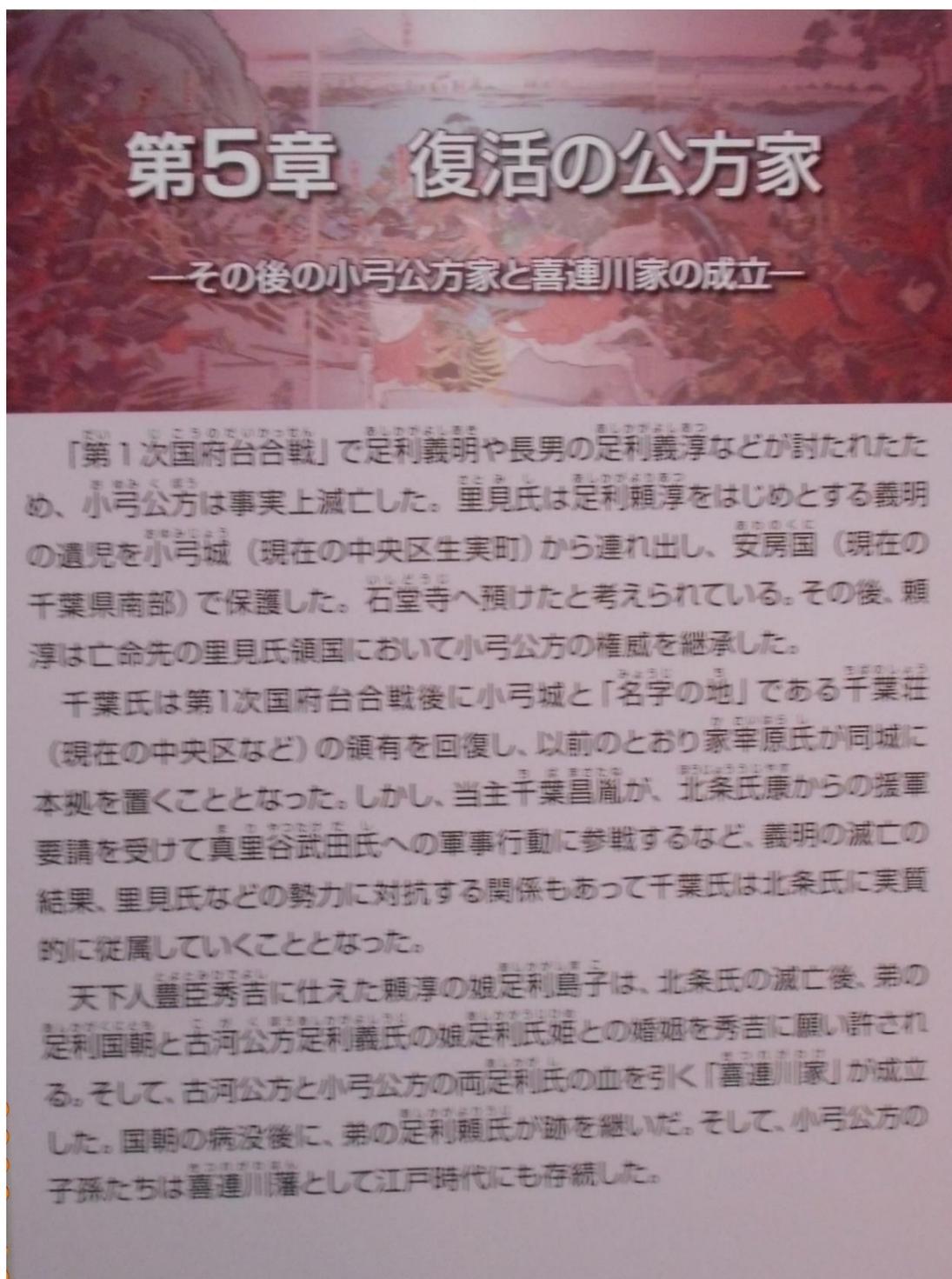
政令指定市移行30周年 千葉市立郷土博物館で特別展

千葉市の政令指定市移行30周年を記念した特別展「我、関東の将軍にならん—小弓公方足利義明と戦国期の千葉氏—」が千葉市立郷土博物館で開かれている。入場無料で12月11日まで。企画したのは同博物館主査の錦織和彦さん(47)。戦国期に小弓(現在の中央区生実町)を拠点に南関東を制し「関東の風雲児」と言われた将軍「足利義明」が、これまで史料の少なさからその実像は明らかにならなかった。展示では、わずか20年で北条氏に敗れ去った義明と、義明から小弓を奪還した千葉氏が北条氏に臣属していく過程など、知られざる戦国時代の千葉市の歴史を掘り起こす。指定文化財となる書状など貴重な歴史的資料やパネル全125点を展示している。八千代市の林英代さん(66)は義明について知りたいと思い、21日に会場を訪れた。「貴重な機会なので、楽しみにしていた」と話した。(佐藤麻理子)

5. また、繰り返しになりますが、会場での写真撮影は禁止されているところなので、本報告メモの取り扱いには、十分注意をお願いいたします。

第5章 復活の公方家—その後のおゆみくぼうけ小弓公方家ときつれがわけ喜連川家の成立

パネル 1. (下記写真の文面は、やや不鮮明なため、別添「小弓公方展、第5, 6章追加資料集」 P.1 も参照願います。)



パネル 2. 「国重要文化財 石堂寺本堂」「同 石堂寺多宝塔」



5-2 パネル「国重要文化財 石堂寺本堂」
 石堂寺は南房総市石堂にある天台宗の古刹。本尊は国重要文化財の秘仏十一面観音像で平安時代の作とされる。本堂は厨子の制作年から永正10年(1513)頃の建立とされる。同寺が南北朝期以来の関東足利氏の祈願寺であったことから、小弓公方足利義明の遺児たちの避難所につながったと考えられている。なお、多宝塔露盤銘にある「当寺小児千寿丸」を、義明の子足利頼淳の幼名とみる説もある。

(同上説明文の拡大)

5-2 パネル「国重要文化財 石堂寺本堂」
 石堂寺は南房総市石堂にある天台宗の古刹。本尊は国重要文化財の秘仏十一面観音像で平安時代の作とされる。本堂は厨子の制作年から永正10年(1513)頃の建立とされる。同寺が南北朝期以来の関東足利氏の祈願寺であったことから、小弓公方足利義明の遺児たちの避難所につながったと考えられている。なお、多宝塔露盤銘にある「当寺小児千寿丸」を、義明の子足利頼淳の幼名とみる説もある。

パネル 3. 「臼井城跡」

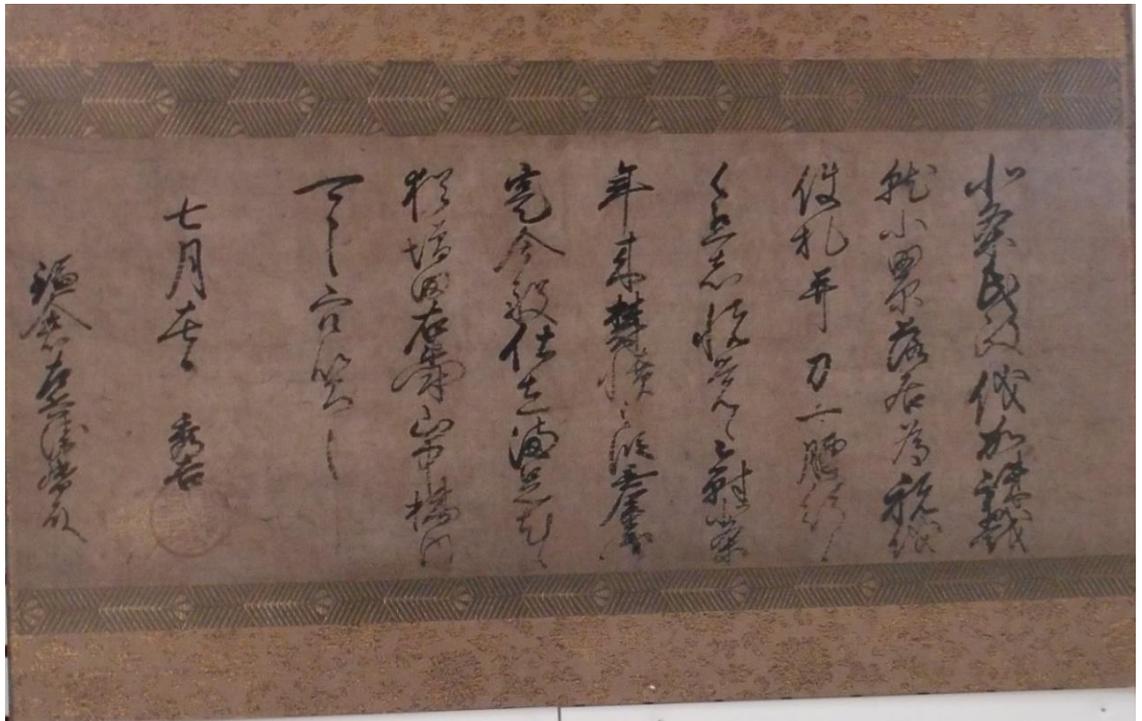


5-10 パネル「臼井城跡」

千葉氏一族でありながら小弓公方足利義明側に付いた臼井氏は、鎌倉時代以来、臼井荘(現在の四街道市・佐倉市・八千代市など)に勢力を有した。千葉氏は臼井氏を取り込むため、第1次国府台合戦後、当主千葉昌胤の次男胤寿を臼井氏の養子に入れた。しかしその後、千葉氏と臼井氏は対立し、天文15年(1546)に胤寿は兄の千葉利胤に討たれ、臼井氏は滅亡した。
 同氏の本拠臼井城(現在の佐倉市)は、印旛浦(現在の印旛沼)に接し、本佐倉城(現在の酒々井町・佐倉市)にも近接する、下総国(現在の千葉県北部など)の重要拠点であった。そのため太田道灌や上杉謙信に攻められたこともあった。

(同上説明文の拡大)

5-10 パネル「臼井城跡」
 千葉氏一族でありながら小弓公方足利義明側に付いた臼井氏は、鎌倉時代以来、臼井荘(現在の四街道市・佐倉市・八千代市など)に勢力を有した。千葉氏は臼井氏を取り込むため、第1次国府台合戦後、当主千葉昌胤の次男胤寿を臼井氏の養子に入れた。しかしその後、千葉氏と臼井氏は対立し、天文15年(1546)に胤寿は兄の千葉利胤に討たれ、臼井氏は滅亡した。
 同氏の本拠臼井城(現在の佐倉市)は、印旛浦(現在の印旛沼)に接し、本佐倉城(現在の酒々井町・佐倉市)にも近接する、下総国(現在の千葉県北部など)の重要拠点であった。そのため太田道灌や上杉謙信に攻められたこともあった。



豊臣秀吉朱印状
 北条氏政儀、加誅戮、
 就小田原落居、為祝儀、
 使札并刀一腰賜候、
 御懇志悦覚候、对北条
 年来鬱憤之段、無余儀
 寔今般仕置満足尤候、
 猶増田右衛門尉・山中
 可申候、穴賢二、
 (天正十八年) (重臣)
 七月十七日 秀吉
 鎌倉左兵衛督殿

5-12 パネル「豊臣秀吉朱印状」
 天正 18 年 画像提供 神奈川県立歴史博物館
 資料は、豊臣秀吉が北条氏を滅ぼした小田原合戦直後に、足利頼淳に与えた書状。秀吉と頼淳の接触を示す初見であるとされる。文面は、北条氏に対抗し続けた小弓公方家の立場に配慮したものである。また、頼淳が鎌倉にいないにもかかわらず、宛所が「鎌倉左兵衛督」になっているのは、秀吉が鎌倉公方の子孫である頼淳の權威を認めた証といえる。秀吉の頼淳の待遇については、豊臣政権が関東足利氏の權威を借りて、関東の統治を安定化させる意図があったとされる。

パネル 5. 「さくら市指定文化財 喜連川藩主足利家歴代墓所」



(同左説明文の拡大)

5-15 パネル「さくら市指定文財 喜連川藩主 足利家歴代墓所」
 喜連川龍光寺(栃木県さくら市)は、足利尊氏の開基である。初め東勝寺と呼ばれていたが、喜連川藩が成立し、初代当主足利国朝の父足利頼淳の院号をとって龍光院と称した。頼淳自身も小田原合戦以降、喜連川に移っており、当寺に葬られている。昭和 28 年(1953)に現在の寺号になった。資料は喜連川歴代当主及び正室などの墓所である。

5-15 パネル「さくら市指定文財 喜連川藩主 足利家歴代墓所」
 喜連川龍光寺(栃木県さくら市)は、足利尊氏の開基である。初め東勝寺と呼ばれていたが、喜連川藩が成立し、初代当主足利国朝の父足利頼淳の院号をとって龍光院と称した。頼淳自身も小田原合戦以降、喜連川に移っており、当寺に葬られている。昭和 28 年(1953)に現在の寺号になった。資料は喜連川歴代当主及び正室などの墓所である。

パネル 1.



第6章 現代（いま）を駆ける

—連綿と続く足利氏の血脈—

明治維新により江戸幕府は倒れ、武士の時代は終焉を迎えた。喜連川氏は足利氏に復姓、華族「足利子爵家」として存続した。なお、初代子爵の足利於菟丸は水戸徳川家の血を引き、最後の將軍徳川慶喜の甥にあたる。また、同家からは東洋史学者として名高い足利惇氏が出ている。本章では、明治時代以降の小弓公方の末裔たちを紹介する。また、コラムとして、小弓公方に関わる女性たちや足利義明に関わる伝承を紹介する。

イラスト「小弓公方家に関わる女性たち 青岳尼、^{せいやくに}足利島子 ^{あしかがしまこ}、^{あしかがうじひめ}足利氏姫



(イラスト:尾野)

| | | |
|--|---|---|
| <p>青岳尼 (生没年未詳)</p> <p>青岳尼は小弓公方足利義明の娘。実名は不明。出家して鎌倉太平寺の住持（住職）となった。弘治2年（1556）、青岳尼は住持としての高い地位と安らかな生活を捨て、里見義弘の鎌倉攻撃の際に、義弘に連れられて安房国（現在の千葉県南部）に行き、還俗して義弘の妻となった。かねてから青岳尼に想いを寄せていた義弘が、戦闘に乗じて彼女を奪ったとの伝説もある。</p> <p>残念ながら、青岳尼のその後の詳細は不明である。</p> | <p>足利島子 (永禄11年(1568)～明暦元年(1655))</p> <p>足利島子は、小弓公方足利頼淳の娘で、足利国朝、足利頼氏の姉にあたる。天正16年(1588)、喜連川城（現在の栃木県さくら市）主塩谷惟久に嫁ぐが、天正18年(1590)、島子は豊臣秀吉を前に逃亡した惟久と離縁し、秀吉に仕えることとなる。</p> <p>島子の尽力により、秀吉は、島子の弟国朝と古河公方足利義氏の娘足利氏姫を結婚させて、関東足利氏を継がせ、喜連川に所領を与えた。このことが後の喜連川氏の成立につながる。島子は秀吉の死後に出家して月桂院と称した。</p> | <p>足利氏姫 (天正2年(1574)～元和6年(1620))</p> <p>足利氏姫は、古河公方足利義氏の娘。義氏の死後に男子の兄弟がいなかったため、氏姫が実質的に古河公方家を継いだ。天正19年(1591)、豊臣秀吉の命により、小弓公方家の足利国朝と結婚、ここに長く対立してきた古河公方と小弓公方の両関東足利氏が統合された。氏姫は国朝の死後は弟の足利頼氏と再婚するが、頼氏のいる喜連川（現在の栃木県さくら市）には行かず、生涯、古河公方由来の鴻巣御所（現在の茨城県古河市）を離れなかった。</p> |
|--|---|---|

上記説明文及びその他の資料については別添「第5・6章追加資料集」を参照願います。

終章 総括—「小弓公方足利義明」が千葉市域と関東にもたらしたもの



終章 総括—「小弓公方足利義明」が千葉市域と関東にもたらしたもの

戦国時代の関東の風雲児とも言うべき小弓公方足利義明。その重要性に比べて一般に周知されているとは言えない、この知られざる「関東の将軍」を、もっと多くの方々に知ってもらいたい。そして郷土千葉の持つ興味深い歴史の一コマに触れていただきたい。当館のこの想いが、小弓公方を今年の特別展のテーマに選ばせました。

足利義明が、「小弓公方」として歴史の表舞台で活躍したのはわずか20年に過ぎません。雪下殿からの自立から計算してもせいぜい28年ほどでしかありません。確かに第1次国府台合戦後も子の足利頼淳以下がその命脈を細々とつなげますが、実質的に小弓公方は、第1次国府台合戦での義明の死により滅亡したとって過言ではないでしょう。けっして長期間とはいえない義明の活動期間ですが、本展を準備していく過程で、改めて、東国の戦国史における義明の存在と、その意義の大きさを感じることができました。

義明の自立の動機は、彼の意図を直接うかがえる資料がないため、憶測にしかありませんが、雪下殿空然から「義明」と名乗った実名にその片鱗を伺うことができるかもしれません。

義明が対立した（実家でもある）古河公方は、原則、京都将軍の実名の「義」以外の一文字を拝領、その下に関東足利氏の通字「氏」を合せた実名を名乗りました。しかし、義明は京都の将軍家が代々受け継いだ「義」の字を名乗り、「明」の字を用いています。この「明」の字には、一般的な「明るい」のほか、「夜があける」という意味があります。戦国の世の光として、暗黒の戦乱の夜を終わらす存在たるという自負、そして義明の意図・野心が表れているかもしれません。

義明の大いなる野心と高い行動力をもっても、義明は飾り物の公方ではなく、その権威や権限を積極的に行使しました。また、諸大名も義明の存在を認めて彼の命令を受け入れました。義明の戦略目的は、古河を制圧し自分が唯一の「関東の将軍」になること。そして、そのために房総や南関東の諸勢力を糾合し、兄の足利高基や甥の足利晴氏と公方としての正当性をめぐって激しく争いました。その余波は関東の諸所に及びました。

ご覧いただいたように、千葉氏、原氏、真里谷武田氏、里見氏さらには山内・扇谷両上杉氏や小田原の北条氏や北関東の小山氏や小田氏などの諸大名が、義明の行動に様々な影響を受けることとなったのです。

義明が志半ばで斃れた第1次国府台合戦での敗戦は、後代の軍記物などでは作戦ミスと虚しい討死として語られました。そのため、小弓公方自体の低い評価につながっていると思われます。前述のように小弓公方足利義明が活躍した時期はけっして長期間ではありません。また、義明の統治者としての才覚や行動に疑義を呈することは可能です。ですが、関東戦国史という大きなスケールで、足利義明の存在を見ていくなれば、戦国時代の千葉市及び千葉氏の歴史を明らかにするうえで欠かせない人物であるとともに、関東の戦国社会の枠組みを変える重要な存在だったといえるでしょう。

近年、従来は無力な存在とされてきた戦国時代の足利将軍家が見直され、その実像が明らかになっています。「今足利氏が熱い」なか、改めて、千葉市にも足利氏の「将軍」が存在し、その興亡が関東戦国史に大きな位置を占めていたことを、本展を通じて知っていただきたく存じます。

資料の制約が多いこと、そして何よりも担当者の力不足から、果たしてこの想いがどれだけ見学者の皆様にお伝えできたか心もとないところです。展示をご覧の皆様が、小弓公方足利義明とその時代について、また戦国時代の千葉市の様子に興味をもっていただけましたら、幸甚です。

(おわりに)

1. 昨年、10月18日～12月11日に開催された千葉市立郷土博物館主催の「政令市移行30周年記念 令和4年度特別展 我、関東の将軍にならん—小弓公方足利義明と戦国期の千葉氏—」について、内容量が大であったため、3回にわたって、紹介してきました。
2. 私としては、今までこのような博物館主催の展示会を見る機会は、多くはありません。今回は、小弓公方足利義明という一人の人物に焦点を当てた特別展であり、博物館側からの話によると、このような展示会は、今まで皆無であったのではないかということです。
3. それは、足利義明に関する資料の少なさなどによるものであろうと思われます。今回の特別展は、そういう意味では大変貴重な機会であったと思われると共に、主催者が足利義明に関する資料を丹念に掘り起こし、先学の研究成果に大きく拠ると言いながらも、一方では小弓公方足利義明の関東戦国史における歴史的意義にまで言及したことは、従来の研究を一步進めたように感じました。
4. 最後になりますが、私からみて内容量が豊富な本展を紹介するに当たって、できるだけ会員の皆様と情報を共有したいとの思いが強くなりすぎたこと、同時に日ごろからの勉強不足や表現力の拙劣などが加わり報告メモが、思いかけず従来には無い分量になってしまったこと、その結果、本展の内容を要領よく十分に紹介し得なかったことに対して、深く反省をし、お詫び申し上げる次第です。

以上